3 衛生害虫の伝統的な対応法

○秦 和寿(都八王子保健所) 栗原 毅(帝京大医)
Traditional control methods of medically important
insects
Hata K., Kurihara T.

燻煙して虫を追払う伝統的な衛生害虫防除具が日本の各地にある。蚊やブユなどの吸血性昆虫を忌避させる方法が主である。これらの防除具は農山村を中心に伝承されてきたが、平成の今、この虫除けの文化が消滅しようとしている。現在、世界的にこのような昔からの方法の見直しがおこなわれている。代表的なものは「蚊火」で北から南まで全国的に使われてきた。主材は稲藁で腰につけ燻し虫を除ける。名称、材質は地方により少しずつ異なる。この「蚊火」や類似の「火縄」「だんのう」等についても図示し差異などについて述べる。

4 川崎市における蚊成虫の捕獲動態(1973-1995)

佐藤英毅(川崎市衛生研究所)
Population dynamics of *Family Culicidae* in
Kawasaki(1973-1995).
Sato H.

本市における蚊科成虫の調査は古くから行われており、一部の地域については1956年からの成績がある。この間、施設の改廃などによって定点の移動したものもあるが、1973年からは統一した方法で調査を進めてきた。その結果、アカイエカは1973年の8,492個体に対して1995年は244個体となっており、22年前の約2.9%にまで減少している。同様にコガタアカイエカでは709個体が13個体になり1.8%に、キンイロヤブカは372個体が6個体になり1.6%に、ヒトスジシマカでは65個体が32個体になり49.2%に、シナハマダラカでは60個体が2個体になり3.3%に、およびオオクロヤブカでは19個体が6個体になり31.6%に減少している。捕獲種では1956年の7属13種から4属6種に減少しており、今回はこれらの経過を未発表の成績を追加して報告する。『蚊の捕獲を担当した各保健所および感染症対策課の諸氏に感謝いたします』

5 埼玉県の水田地帯における蚊の発生動態

(3) 最近19年間の季節消長

○浦辺研一(埼玉衛研) 池本孝哉(帝京大)
Population dynamics of mosquitos in the
rice field areas in Saitama, Japan:(3)
Seasonal prevalence during 1977-1995
Urabe K. and Ikemoto T.

埼玉県大宮市、浦和市および富士見市にまたがる水田地帯において、シナハマダラカとコガタアカイエカの発生動態を19年間にわたって調査した。

雌成虫における各年の平均的な季節消長は、シナハマダラカでは5月中旬から捕獲され始め、7月になると急増し、7月下旬に特出したピークがみられた。その後減少し、10月下旬にはほとんど捕獲されなくなった。コガタアカイエカでは、発生時期の始まりと終わりの季節にはシナハマダラカと差がなかったが、発生の中心となる時期は8月中下旬であった。幼虫個体数の季節消長は、調査時期の前後を補って考えれば、両種とも成虫のそれときわめてよく一致していた。

6 グアテマラ市郊外の実験的発生源におけるネッタイシマカの発生観察

○緒方一喜(日環セ)・Antonio Samayoa・Victor Barrios(グアテマラ厚生省)
Observation of *Aedes aegypti* by the
experimental breeding places in the
suburbs of Guatemala City.
Ogata, K., Samayoa, A. and Barrios, V.

自然界におけるネッタイシマカの季節的発生消長と平行して実験的に設置した水容器における発生を1995年にグアテマラ市郊外の San Miguel Petapa の住家の庭で観察した。用いた容器は高さ23cm 直径17cm のガラスジャーで約3/4の水を充たした。比較のため庭の中央・木陰・軒先に設置した。発生する幼虫は5月から増え始め8月にピークを持つ一山型を示した。この傾向は周辺住宅地のプレートー指数の消長と一致しまた降雨量消長ともよく一致した。しかし庭中央の容器には発生がきわめて少なかった。これは樹木から落下する果実に水が汚染されたことによるものと考えられた。